

あじさい

第 108 号



2021年3月
日本野鳥の会三重 <http://miebird.org/>



チュウヒの繁殖継続の危機 ～木曾岬干拓地のさらなる開発計画をしないように要請～

保護部 桑名市 近藤 義孝

木曾岬干拓地ではチュウヒが継続的に繁殖しています。日本野鳥の会三重と愛知県野鳥保護連絡協議会（日本野鳥の会愛知県支部などが所属）は木曾岬干拓地におけるチュウヒの繁殖や越冬期のねぐら入り、鳥類の生息状況を2001年から調査しています。

昨年12月22日に三重県は、運動広場を整備する予定だった木曾岬干拓地（木曾岬町）の約60ヘクタール分について、公共工事で発生した建設残土置き場とする方針を明らかにしました。

そのため、下記の要請を3団体連名で三重県に提出しました。併せて、資料も載せます。



木曾岬干拓地 右手奥が今回の開発計画地

目次

チュウヒの繁殖継続の危機～木曾岬干拓地のさらなる開発計画をしないように要請～	2
表紙の言葉	2
拡大するジョウビタキの繁殖	4
この冬のミヤコドリ	7
鳥羽市船津町のタカ渡り	7
シギ・チドリ類の年齢・季節による羽衣の変化 —連載第23回ケリとタゲリ—	8
会報への投稿を歓迎します・ 会報の公開について	13
ほのぼの鳥さん Watching	14
野鳥記録	16
事務局だより	19
探鳥会報告（2020年11月～2021年1月）	20
ガンカモ調査終了	24
編集後記	24

表紙の言葉

イソヒヨドリ

度会町 小坂 里香

春になると朗々と美声を響かせるイソヒヨドリ。オスの美しい羽色は、普通腫でなければカメラマンの人気の的となりそうですが、幸い追っかけの対象にはならないようです。

近所のイソヒヨドリもまもなく、子育てで忙しいシーズンを迎えます。公園の散歩道で、太った芋虫をさかんに振り回していました。巢の中で、ヒナが大きな口を開けて待っているのでしょうか。

新型コロナに振り回される人間界ですが、自然の営みはこの春も粛々と行われることと思います。

2021年2月1日

三重県知事 鈴木 英敬 様

日本野鳥の会三重	代表	平井 正志
日本野鳥の会愛知県支部	代表	新實 豊
公益財団法人日本野鳥の会	理事長	遠藤 孝一

木曾岬干拓地のさらなる開発を中止してください(要請)

中日新聞(2020年12月23日付、三重総合面)によると三重県は木曾岬干拓地におけるチュウヒ(環境省・絶滅危惧ⅠB類/国内希少野生動植物種)の採餌および繁殖場所の一部を今回新たに、残土置き場として開発するとのことである。木曾岬干拓地(444ha)はかつて農業用地として干拓されたが、しかし、農地としては利用が進まず放置され、やがて湿性草原となり、近年はチュウヒが繁殖するようになった。2004年までチュウヒ3つがい繁殖活動に入り、2003年には3つがいとも繁殖に成功した。しかし、三重県は2006年から木曾岬干拓地の北側の埋め立を開始し、ストックヤードやわんぱく広場として約85haが埋め立てられたことにより、チュウヒの採餌および繁殖場所ではなくなってしまった。その際、代償措置として三重県は干拓地の南端約65haを造成し、3つがいの営巣を目標とするチュウヒ保護区を設置した。しかし、その後、上記のような3つがいの営巣は見られず、代償措置の保護区が3つがいの営巣を支えるには到底十分な面積ではなく、三重県の想定が誤っていたことは明白である。しかし、その誤りの原因を究明しようとはせず、その後、2013年にはさらに伊勢湾岸自動車道の南側約65haにソーラーパネルを設置した。これにより、チュウヒの採餌および繁殖場所はますます狭くなった。チュウヒは2012年以降、1つがいしか繁殖行動に入らなくなり、繁殖に失敗した年もある。それは、採餌面積の縮小が大きく影響しているものと考えられる。

今回の残土置き場など開発予定地は2015年及び2016年にチュウヒが営巣した場所でもあるが、今回の開発が行われることで、残る1つがいのチュウヒの繁殖すらできなくなる可能性が極めて高い。

チュウヒは2017年8月29日に種の保存法における国内希少野生動植物種の指定種となることが閣議決定された。本州中部以西で繁殖が継続されているのは河北潟と木曾岬干拓地などわずかな場所しか残っていないが、この三重県の方針はチュウヒの繁殖を絶滅に追いやるものである。

三重県はこのような開発を行うべきでなく、むしろチュウヒ保護の施策を積極的に行うべきである。

要請の説明資料

表。木曾岬干拓地でのチュウヒの繁殖状況(日本野鳥の会三重などの調査)

年	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020
営巣数	3	3	3	2	2	2	2	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1
繁殖成功巣数	0	3	2	1	1	1	1	2	0	0	0	1	1	1	1	0	0	1	0
巣立った幼鳥	0	3	2	2	1	1	3	6	0	0	0	3	2	4	3	0	0	1	0

注：2006年から高速道路北側で埋め立て、2013年からメガソーラー工事着手



木曾岬干拓地のチュウヒ

・繁殖に成功した営巣地



国土地理院地図を加工して作成

日本野鳥の会の2020年12月10日のプレスリリースではチュウビの国内での繁殖数が136つがいであり、オジロワシ(150つがい)、イヌワシ(241つがい)、クマタカ(900つがい)と比較し、もっとも繁殖数の少ない猛禽であるとしています。チュウビの繁殖数は北海道117つがい、本州以南19つがいであり、本州以南の内訳は、青森4、秋田4、石川7、茨城1、愛知1、三重1、福岡1としています。

また、本州以南では個体数の減少が激しく、2010年頃までは40～50つがいほどが繁殖していましたが、現在は19つがいと、半数以下となっていました。その主な原因は、繁殖地となっている埋立地や造成地の植生遷移(ヨシ原の灌木・樹林化)のほか、太陽光発電施設などの開発行為やカメラマンの過度な接近など、人為的要因も大きく関わっています。

拡大するジョウビタキの繁殖

大塚之稔(日本野鳥の会岐阜 ジョウビタキ研究グループ)



ジョウビタキは冬鳥として全国各地の平地から山地の林縁、農耕地、河川敷の林などに飛来し、人家の庭先や市街地の公園などでも見られる馴染みのある鳥です。主な繁殖地はバイカル湖周辺、モンゴル、ウスリー地方、中国北部であると言われています(日本鳥学会2012)。冬鳥として親しんできたジョウビタキが今、各地で繁殖を始めており、私の住む岐阜県でも高山市で繁殖が拡大しています。

ジョウビタキの繁殖が初めて記録されたのは、北海道上士幌町で1983年に雛5羽が巣立ったことが確認されました。鳥類では時折、偶発的な繁殖をすることがあり、これもそうではないかと考えられました。

本州での繁殖

2010年6月、日本野鳥の会の創始者である中西悟堂氏の功績を巡る会が山梨県で行われ、参加していた中村滝男氏(生態系トラスト協会)が偶然、長野県富士見高原でジョウビタキの雄を発見しました。この時期にいるのはおかしいということになり、山梨県の林正敏氏(野鳥の会諏訪支部)が中心となって調査したところ、繁殖していたことが分かりました。これが本州初の発見となりま



ジョウビタキ 雄

した。林さん達はその後も八ヶ岳を中心に調査を継続し、富士見高原、霧ヶ峰高原などで2019年までに100を超える巣を発見しています。最近では諏訪市内まで繁殖地が広がっているそうです。

長野県に続き、2013年頃から他の県でも繁殖が確認されるようになりました。群馬県、山梨県、岡山県、兵庫県、鳥取県などです。

岐阜県での繁殖

岐阜県では 2015 年に高山市内の 3 か所で繁殖をしていることが分かりました。これが岐阜県の初記録となったのですが、実はその前年に兆候がありました。2014 年に高山市内の 7 か所で囀っている雄を確認しています。発見当時の様子を飛騨地域の会報（飛騨の野鳥 2014 年 8 月号）から抜き書きしてみます。『6 月 7 日 道路側からオオルリの声。声は住宅地の方から聞こえてくる。住宅地に向かっていくにしたがい声のリズムが違っていることに気づく。オオルリ特有の最後の“ジジッ”が無いし、長めのリズムではない。ホオジロに近い鳴き方かな。強いて言えばオオルリがホオジロの真似をした感じだった。後日の観察でホオジロとカワラヒワが近くで同時に鳴いているように聞こえた。声の主は住宅地の真ん中、電線にとまっている。「ジョウビタキだ!」』

表 1 高山市での繁殖数

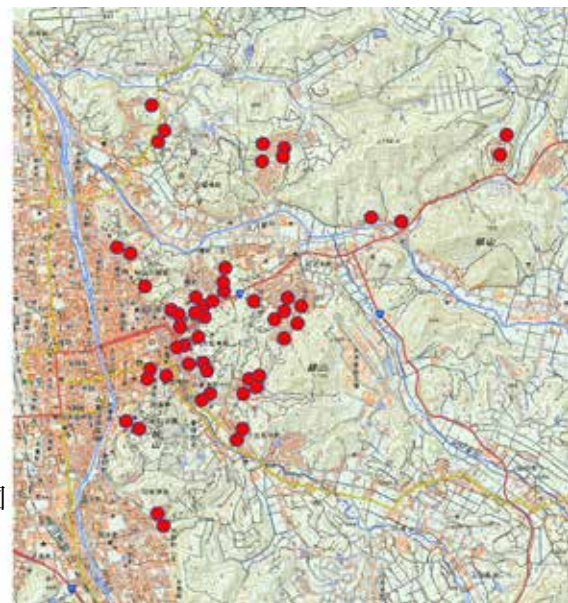
2015 年	3 か所
2016 年	15 か所
2017 年	31 か所 下呂市 1 か所
2018 年	53 か所
2019 年	76 か所
2020 年	89 か所

この年は 6 月になると雄の囀りが聞かれなくなり、下旬には姿も消えました。雌が縄張り内に入ってこなかったのではないかと考えます。そして 2015 年の繁殖確認になりました。この年は雛 3 羽、5 羽の巣立ちを確認しています。

2016 年にはいきなり 15 か所に増えます。2017 年にはさらに倍の 31 か所になり、高山市の南 40km 離れた下呂市でも繁殖が確認されました（表 1）。下呂市のつがいは連続して 3 回も繁殖し、5 羽の雛を巣立たせています。卵は合計 17 卵（5-6 卵）ですが無精卵が多かったようです。次の年にも繁殖を期待したのですが、雌しか現れませんでした。ところがなんと雌だけで巣作り、産卵、抱卵をしていることが分かりました。この個体は、ジョウビタキは雌だけでも繁殖が進行することを教えてくれたのです。表 1 の数の中には複数回繁殖のものも含まれています。

2018年度

● 推定営巣地
複数回の繁殖は普通に行われていることが推定される。



国土地理院地図を加工して作成

営巣場所 高山市の営巣環境は特別？

ジョウビタキが巣を作った場所としては、住宅の玄関のひさしの上、雨どいの中、工場の換気扇、倉庫の中、ガレージの鉄骨の間など、分かっているものはほぼ 100% 人工物です。郵便受けというのもありました。キセキレイの営巣場所をイメージしてもらえるとよいと思います。

他府県の営巣場所もほぼ同様の人工物であると言われていますが、高山市の特徴は市街地にあるということです。山梨県では八ヶ岳山麓の別荘地、鳥取県でも大山山麓の高原の別荘地なのですが、高山市は住宅地の中に営巣地があり、目の前が通学路になっていたり、幼稚園のベランダであったり、人通りの多い所に巣が作られています。共通していることは数十 m 先には林があり、おそらく巣立ちした雛が入り込みやすいのではないかと考えられます。



高山市の繁殖環境



親と雛

カラーリングによる個体識別

調査を進めていくうち、いくつかの疑問が出てきました。高山市内では少数ですが、越冬する個体もいます。繁殖しているジョウビタキは越冬している個体なのか、それとも別の場所からやってくる個体なのか。つがい形成はどのように行われるのか。繁殖期間中、つがい関係は維持されるのか。翌年も同じつがいで繁殖するのか。巣立ちした幼鳥は何処へ行くのか。・・・等。下呂市のつがいは3回連続して繁殖したのですが、証拠がありません。この疑問を解決するには個体識別をするしかありません。そこで、環境省、岐阜県に捕獲許可を申請し、足にカラーリングを装着することにしました。2018年につがいの2羽、その後2020年までに41羽の巣内雛に足環を付けています。

その結果、2018年に足環を付けたつがいが3年連続して年3回繁殖したことが分かりました。2回繁殖する小鳥類がいることはよく知られていますが、3回連続とは驚きです。3月頃から繁殖を始め、8月頃に最後の雛が巣立ちします。繁殖期間もずいぶん長いことが分かります。



成鳥への標識

本当はもっと多くの個体に足環を付けたいのですが、大きな問題があることに気がつきました。繁殖場所が住宅地にあるため、カスミ網を張るのが気になります。もちろん市役所や警察には届けてありますが、あまり堂々と捕獲することができません。そこで目立たない場所の巣内雛に足環を付けました。ところが捕獲時期を間違えると、雛が巣から飛び出してしまうと巣立ちそのものに影響を与えてしまいます。最善の時期を考えて捕獲をしました。一度付ければジョウビタキは足（ふしよ）が長いので観察には適しています。



雛への標識

奇跡的な発見

2020年3月、鳥取県支部の土居克夫氏から「岐阜県で足環付きジョウビタキの雄が撮影されたが、大塚さん達が付けたものではないですか？」という連絡が入りました。送られてきた写真を見てびっくり。我々が付けたものに間違いありません。場所は各務原市内の公園で、ここは航空自衛隊の航空機が離発着するところを撮影できるというマニアの方にとっては有名な場所だそうです。撮影者は三重県在住のSさん。たまたま航空機を撮影にきていたところ公園内で足環の付いたジョウビタキを発見し、撮影したということです。貴重な記録になるのではと、ジョウビタキの研究をしている土居さんを調べ、写真を送ったことが分かりました。色の組み合わせから、前年の6月6日、高山市内の巣内で足環を装着した6羽の内の1羽です。発見された場所は、巣立った場所から直線距離で100km離れています。この発見により巣立ち後にどのような場所で越冬しているかも分かりました。

足環を付けた鳥が再発見される確率は1%もないことを考えると、奇跡的な発見ですし、何よりも「よく生きていてくれたなあ。」と、感謝したい気持ちになりました。

終わりに

ジョウビタキの繁殖記録、標識調査は地元高山市在住の宝田延彦氏、直井清正氏の努力に他なりません。大塚は標識技術や申請書などのお手伝いをしただけです。宝田氏はほぼ毎日、早朝から勤務時間まで市内を徒歩や自転車で廻り、繁殖の状況を記録しました。今年もジョウビタキの繁殖が始まりますが、高山市では繁殖地域がどんどん広がっており、普通の鳥になりつつあります。

東海地方でも新たな繁殖地が見つかるのではと思いますが、近年の気候変動と関係しているのでしょうか。